

分散会 1 2

司会者 和家 秀樹

記録者 濱石 一利

会場責任者 宇都宮 正男

新潟市アグリパーク（新潟県）

新潟市アグリパークは、平成 26 年 6 月に日本初の公立教育ファームとして開園しました。本園の目的は、①農業体験学習を通じて、農業に対する理解を深め、郷土愛を育むこと、②生産者等に対して、食品の加工等に関する技術的支援を行うことにより農業の振興に資すること、です。さまざまな体験活動を通して、「命の大切さ」に気付くとともに「食への関心」が高まっています。また、トイレのスリッパをそろえる子ども、素直に「ありがとうございます。」と言えるなど、社会性を育む場となっています。大人も子どもたちからたくさんのお話を聞いています。



真柄 正幸氏

尾道市NPO法人おのみち寺子屋（広島県）

尾道市NPO法人おのみち寺子屋は、13年前から「おの100挑戦隊～感動創造の旅～」を行っています。これは小学4年生から6年生まで抽選で選ばれた100名が4泊5日をかけて尾道市内100kmを歩き抜くという事業です。小学生から社会人までが、事業へのかかわりを通して、それぞれの目標に向かって成長していきます。もちろん楽しいことばかりではありません。でも、得られるものが多いから私たちは続けられます。大事なことは「フィードフォワード」「タスキつなぎ」。「まちづくりは人づくり」です。自分たちのまちは自分たちで創っていきます。



加良 莉夏氏

窪内 真帆氏

愛媛県立新居浜南高等学校ユネスコ部（愛媛県）

愛媛県立新居浜南高等学校ユネスコ部は、①地域に対する誇りを持つこと（シビックプライド）、②地域に対し情報発信活動を行うこと、③ESD活動を推進していくこと、を大きな目的として日々活動しています。聞き取り調査や現地調査、別子銅山スタディツアーや中学校での出前講座等をはじめ、たくさんの活動を継続して実施する中で、成果と課題が見えてきました。私たちのシビックプライドが高まったのはもちろん、校内でも地域意識が向上しています。これからは「学びの絆サイクル」の実現と若者が集う町づくりを目指してがんばります。



愛媛県立新居浜南高等学校ユネスコ部

新潟市アグリパーク（新潟県）

新潟市はなぜこうした事業ができるのか。

— 新潟市は政令指定都市でありながら食糧自給率が60%を超えている。市長は子どもたちにそのことを自負させたいという思いがあり、実現につながった。またフランス

のナント市と姉妹提携をしていること、旧市との連携も大きく関係している。

学習プログラムは誰が作っているのか。

— 学校支援課と教育政策監が中心となって行っている。プログラムが子どもたちの学びに生かされるのかを市教育委員会とアグリパークとで検証している。

先生たちにどう広めていったか。

— 教育委員会が主催する「学校説明会」、「教職員研修会」、「宿泊研修」を実施するとともに、初任者研修や校長会の会場として利用していただくなどして周知を図っている。

○ 本物に触れるということの意味は大きい。牛に触り、体温を感じた子どもが初めて牛

乳を飲むことができたり、育てたピーマンを生かじりさせることで、ピーマンが甘いと

いうことに初めて気付いたりしている。

○ 新潟市の小中学校に地域教育コーディネーターを配置している。さらに教育委員会だけでなく他局（農林水産部や福祉部等）との連携等により「教育に関する事業」が充実している。

○ スタッフも子どもから学んでいる。子どもからの「ありがとう」で何より元気をいただき、翌日のエネルギーとなっている。

○ 冬場の活動を充実させること（現在、いちごやチューリップを栽培してプログラムに生かすことを検討している）や大規模校（3学級以上）への対応が今後の課題である。



尾道市NPO法人おのみち寺子屋（広島県）

小学生をどうやって募集しているか。

— 市内全部の学校に資料を配付している。市外の小学生はHP等で募集している。4～6年生が対象で、抽選している。

予算はどれくらいか。

— 小学生から2万4千円、中学生のボランティア研修生から1万3千円、高校生スタッフ、大学生の学生スタッフから3千円を集めている。1年を通しての研修は、別途徴収している。また支援企業一口一万円で90万円くらい集まる。総額350万円くらい。教育委

員会等の名義後援はいただいているが、助成金はいただいている。組織の自立を目指している。

どのような子どもの成長が見られたか。

- 保護者の手紙から「家でお手伝いをするようになった」「『ありがとう』を言うことが多くなった」「友達が増えた」「我慢できるようになった」、小学生の時に体験した子どもがボランティアスタッフとして帰ってくる等数多く成長が見られる。
- 1年間をかけて、大学生が中心となって企画・運営を行っている。1～4月はプレリーダー養成、5・6月はリーダー養成、7・8月はシミュレーション能力の育成や救命救急講習、8月実施（4泊5日）、9～12月で振り返りや次年度へのタスキつなぎ等を行っている。
- 参加者（小学生・中学生・高校生・大学生・社会人）全員にそれぞれ「事業へのかかわり」がある。大学生スタッフは、フィードバックではなくフィードフォワードの理念で、自らの夢の実現に向けて1年間の取組を振り返る。また難しいのが次のスタッフを集めること、タスキつなぎである。このことについては、日頃の姿勢、取組が真の広告塔になっていると考えている。
- 第5回の活動から、沿道での保護者の応援を廃止した。保護者も成長するよい機会になっている。成功・失敗体験の理由を考え、自分の強さ・弱みを知りながら人とのかかわりを深めている。

愛媛県立新居浜南高等学校ユネスコ部（愛媛県）

なぜユネスコ部に入部したのですか。

- 自分を変えたい、人前で話せるようにしたい、将来の夢に生かしたい。小学生の時に当時の高校生から別子銅山の説明をしてもらい、ユネスコ部に憧れていた。ユネスコ部の先輩が、母の職場でプレゼンをして感動していた。

これまでの活動において、どのような成果と課題があったか。

- 横（学校間、地域等）の関係が深まった。シビックプライドが高まった。校内生徒の地域意識が高まってきている。等の成果が挙げられる。課題としては、小中学校との連携、学びの絆サイクルの実現、持続発展可能な「まちづくり」が挙げられる。

「学びの絆サイクル」「持続発展可能なまちづくり」についてもう少し聞きたい。

- 「学びの絆サイクル」とは「高校生が小中学生に教える・伝える」という活動を繰り返していくということ。私も小学生の頃、高校生の話を聞き、感動し、この部を選んだ。「持続発展可能なまちづくり」は、倉敷市のように歴史を生かしながら若者が集う街にしていきたいという思いからきている。現在、そうしたことを視野に入れながら別子銅山産業遺産創造塾等に参加している。
- （部活動の顧問としては）こうした活動を通して、自己の生き方を見つけてほしいという願いがある。
- 「喜ばれるという喜び」を体感している。今後の活躍にも期待したい。

- 高校生の発表を聞いて大変感動した。教育の地産地消がまさに始まっている。